
見惚れる月

金弘 美樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

見惚れる月

【Zコード】

Z6207G

【作者名】

金弘 美樹

【あらすじ】

月と桜をテーマにしたダークで大人な高佐物語です。今回は高木君視点ですが、ちょっとキャラが変わっているような・・・(汗)かなり暗めで無機質な文章ですが、一応ラブストーリーです。それでも良いという方はどうぞ。

(前書き)

内容が暗い「え、出来るだけ直接的な表現は避けるようにしていますが大人な関係を描いてるので、一応15禁にしています。そういう設定が苦手な方や許せないという方はご注意下さい。

後味の悪い事件だった。

その不快感は退院して家に帰った後もなお時折顔を覗かせた。その度に酷い頭痛に見舞われる。こんなに嫌な事件に遭遇したのは刑事になって以来初めてかも知れない。一緒に退院した彼女に心配を掛けたく無くて、その感情に蓋をする。いつもと同じ顔で笑う。しかし、それもいよいよ限界に近づいていたようだ。彼女の姿が浴室に消えると同時に知らず知らず盛大な溜め息が出た。

冷蔵庫から出したばかりの缶ビールを片手にオレはベランダに出る。空には真ん丸な月。そして眼下には薄桃色の花が青白い月光を受けた淡い光を放っている。誇らしげに天を仰ぐ花々は、昼間目にのとはまた違う妖艶な美しさを湛えていた。手摺りに寄り掛かってその花を眺めながら、オレはふと学生時代に読んだある小説の有名な文句を思い出す。

桜の樹の下には死体が埋まっている。

鮮烈なその一文に頭をがつんと殴られたような衝撃を受けた事を思い出す。

一般の人より死体を目にする機会が多い仕事をしているせいなのか、はたまた夜の桜の妖艶な美しさのせいなのか、それはあながち嘘では無いかもしれないと錯覚してしまう。こんな何の変哲もない公園の桜にさえそんな事を思つてしまつのだ。今日のオレはよっぽど疲れているのだろう。自嘲ぎみな笑みを漏らしながらブルタブを引き、冷えたビールを喉の奥に流し込む。生憎今日は何本飲んでも酔えそうに無かつた。

オレは再びその樹を見下ろしながら、思考を巡らせる。この樹の下に死体が埋まっているというのなら、果たしてその死に人の魂は一

体何処へいくのだろう。

昔祖父母から良い魂は極楽浄土へ昇り、悪い魂は地獄に墮ちると聞いたことがある。それが事実なら、一体誰がそれを判別するのだろう。神か。己か。死後の世界というものを体験した事の無いオレには残念ながら判らない。ただ、誰にだって善意が在り、また煩惱が在る。現にオレだつて・・・

「こんな所に居たんだ。」

背後から突然声を掛けられ、はっと我に返る。振り返ると風呂上がりの彼女が苦笑を浮かべてこちらを見ていた。

「突然居なくなるんだもん。探しちゃつたじゃない。」

少し拗ねたような、怒ったような顔で呟く彼女がなんだか妙に幼く見えて、思わず笑みが零れる。

「すみません。月が綺麗だつたんで。」

それは決して嘘では無かつた。しかし、それが全てでも無かつた。彼女がその事に気付いたかどうかは判らない。穏やかな笑みを浮かべた彼女はオレの隣に並んで手摺りに身体を預け天を仰いだ。

「本当。綺麗な月。」

見上げる彼女の横顔が余りにも美しくて思わず見惚れた。月明かりに照らされた彼女は、夜の桜にも劣らぬ艶っぽさだ。オレの中に眠つてゐる邪まな感情がもそりと目を醒ましたような気がした。

そんな事は微塵も気にしていない彼女はふと視線を落とし、眼下に広がる幻想的な光景に気付いて目を見張る。そして、しばしその光景に見入つた後で不意に何か思い付いたように振り返り、オレが手にしていた缶ビールを奪つて一口煽ると悪戯っぽい瞳で笑つた。

「ねえ、お花見しに行こつか?」

目を細めて笑う彼女から先程奪われたビールの缶を取り返し、室外機の上に置く。

「涉くん?」

怪訝な顔でオレを呼ぶ彼女の手を引き寄せる。華奢な彼女の身体は

すっぽりと腕の中に収まつた。

「どうしたの？」

少し困ったような顔で彼女が問つ。しかし、オレはそれには答えず、彼女の細い身体を強く抱きしめた。彼女は全てを悟つたように体中の力を抜いて無防備にオレの胸にもたれかかる。背中に手を回し、ぎゅうっとシャツを掴むその姿が堪らなく可愛い。

「いいのよ。無理しなくても。」

腕の中で彼女がぽつりと呟いた。シャツを握り締めていた手をゆるゆると離し、そつとオレの背中を撫でる。泣きじゃくる幼子を落ち着かせるようにそろつと。

「許せなくて……」

オレは小さく呟いた。彼女が僅かに頷く。押さえ込んでいた感情が一気に溢れ出し、頬を伝つた。

「割り切らなきゃいけないって解つてたのに、オレ……」

彼女は何も言わない。ただ黙つて優しく背中を撫でてくれる。たつたそれだけの事で、心はいつしか凧いでいく。

愛おしい。彼女の優しさが。この温もりが。

「美和子さん……」

掠れた声で彼女の名を呼ぶ。背中を撫でていた手が止まり、彼女が心配そうな瞳でオレを見上げた。唇でその愛おしい温もりに触れる。

「ん・・・・」

塞いだ彼女の唇から甘い声が零れた。今は彼女の優しさに甘え、その温もりに溺れたかった。そうしなければ、この痛みに耐えられない。そんな気がした。それは自分勝手な欲望だと解つてはいたけれど。

ゆっくり唇を解放すると彼女は頬を上気させ、視線を天に向け照れ臭そうに呟いた。

「用が・・・・見てる。」

その言葉につられてオレは空を見上げた。そこには銀色の光を放つ大きな月。オレの中で渦巻く不快感や安堵感、邪まな感情さえも全て見透かすような、それでいて包み込むような優しい月。

「すみません。」

俯きがちに謝るオレに彼女は小さく微笑む。白い腕がするりと伸びて来て首に絡まり、ぐいっと引き寄せられる。唇に彼女の柔らかな温もりが触れた。次第に深くなつていく口づけに混乱しながらも、この温もりを手放したくないという本能が思考を支配していく。

「涉・・・抱いて。」

彼女が消え入りそうな声で呟いた。それが彼女の本心から出た言葉なのかどうかは判らない。ただ、彼女がオレの全てを理解し、それに応えようとしてくれている事だけは判つた。繫ぎ止めていた理性の糸がふつりと切れる。

答えるように彼女の唇にひとつキスを落とす。彼女は何も言わなかつた。華奢な身体を抱き上げて寝室に運ぶ。

「『めん。』

耳元で囁くと、彼女は微かに笑つた。

「謝るような事してないじやない。」

包み込むようにぎゅうっとオレを抱きしめる。

やつぱりオレはあなたには敵わない。

熱を帯びて潤んだ瞳で見つめられる度に。甘い声で鳴かれる度に。白い肌に紅い華が咲く度に。狂おしい程の愛おしさが胸に込み上げる。あなたの愛を感じて心が満たされる。

そう、あなたはオレだけを照らす月。オレの中に存在する全ての感情を見透かし、優しく包み込んでくれるオレだけの月。あなたの愛は、あの月の光のように穏やかで、決して絶える事はない。

「美和・・・・・」

小さな声で愛しい彼女の名前を呼び、その耳元ではつきりと囁いた。

-世界で一番愛してるよ -

彼女は一気に相好を崩す。夜空に輝く月のよつに美しいその笑顔に、オレはただ見惚れるしか無かつた。

(後書き)

満開の桜と満月に間に合わせたくて、急いで書いたので、おかしなところもいっぱいあると思います。かなり暗い話で高木君のキャラがちょっと違うのが自分でも書いててどうなん?って思つたんですけど。ちなみに作中で出てきた『櫻の樹の下には死体が埋まっている』というフレーズは梶井基次郎氏の『櫻の樹の下には』より引用させていただきました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6207g/>

見惚れる月

2010年10月15日22時15分発行